

日本を再発明する

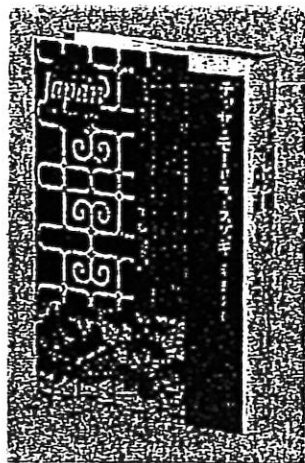
テッサ・モーリス＝スズキ著、伊藤茂訳

近現代史を「国民国家の自叙伝」としてではなく、国民国家の境界線というプリズムを通して描きなおすとき、日本という対象はどのように現れてくるだろうか。

テッサ・モーリス＝スズキは、初期近代から現代にいたる「日本」の境界をめぐる議論の系譜について、自然、文化、人種、ジェンダー、文明、グローバルイゼーション、市民権という、多様かつ相互に関連する問題群を切り口に再構成し、時代とともに変容する日本像の背後にはたらく権力構造を分析する。

境界という主題を通じて本書は、琉球／沖縄、アイヌ、植民地出身者といったマイノリティを生みだし、差別しつつ統合することで展開してきた近代国家の統治そのものを、国境制度とともに問いなおす。

原著は1998年に刊行され、同時代の歴史学、思想史、社会理論の成果をふまえること



以文社・3024円

「共同通信」

2014. 4/3 (日)

硬直した境界消すヒント

もに、排外主義の国際的な連鎖も視野に入れている。

著者はナショナリズムを、「われわれ」と「かれら」に世界を分断し本質化するレイシズムの文脈で捉える。ひとが彼我の分断にとらわれずに生きる可能性を肯定するためには、国家に排他的に帰属する単一で均質な実体として個人を理解せず、「すべての個人が参加する複数のアイデンティティーを認め」、帰属の複数性と重層性にもとづく市民権を認める必要がある。そのためには「化石化したドグマによって敷かれた硬直した線を消去し、交差や多様性、移動性、変化を包み込む新たな境界線を描き出」すことが欠かせないと説く。

現在の日本にひろがる自閉的な右傾化とレイシズムの展開を考慮するとき、本書の邦訳の価値は狭義の歴史書としてのものにとどまらない。多文化・多民族社会の民主主義にむけて諸制度を再設計するために何が必要なのかについてもヒントがふくまれている。本書以後の著作「辺境から眺める」「批判的想像力のために」などととともに、とくに若い世代に読まれるべき一冊である。

(葛西弘隆・津田塾大教授)

TESSA・MORRIS-SUZUKI 1951年英国生まれ、オーストラリア国立大教授、専攻は日本経済史、日本思想史。著書に「北朝鮮へのエクソダス」など。